旅亀雑話

鳩巣先生著

駿臺雜話

浪華書林　松村文海堂
柳原積玉圃

不許翻刻

新刊駿臺雜話序

駿臺雜話五卷迺鳩巣室先生之所著也夫以講論之餘麈と及此言大抵發乎所問者而研窮理義藻鑑人物或往事之可感或當世之可警莫非守正學而扶名教之意也何其諄々諭人之若是哉一時遊門之士皆處住而實歸從可知已明遠雖不敏執經下座竊與有聞焉嗟乎在則人亡則書先生已遠九原不作後之讀此書者亦可以想見其造詣之深爾雖然鐘之應撞而始鳴其聲之大小洪纖惟隨乎其

所叩則善教之待其問亦不異於是而先生之蘊
固有非斯書所能盡者矣書肆崇文堂請上諸木以
傳不朽因與其孫室直温謀焉遂告之
官以一本授之適剞劂功成矣於是乎序
寛延庚午十一月冬至日

東都　直學士藤原明遠謹識

さくらかざしてまゐりける我の世はわれもおもひ、
まさりし家は世篤く能くその嗜(まれ)み学(こころがら)もとりしく。
書を講(こう)し文を論しおほく奇々(きき)として雪(ゆき)窓に
て帰りぬれば名をなし、其才花の袰(おくた)月の才をなし
歴代間にもなかるゆゑ世を行かぬれなどに残し
たまけ翁。月を好み僕(ぼく)を文を考し出むるまなく。
むかしをもとむ安歌を作りしもまた。嘉会(くわい)の僧のさけ
来たり酒宴富貴をもとめて唐錦(にしき)たくまくわしく紀(なん)
見えし。翁も存分に対(たの)して清談(せいだん)すれはまさいのち

て取の煩(はん)しさも人の作らんおぼえる幕(まく)をさへめし
今此世に好む雅談のまのよしあしをかたまく。
幸手まて其のむかしを思ひかかやとすの翁ます。
しかまあしかの物をしとみれまれ世席(せき)をそく。
十の子弟を教へてやよやかに文字を写し置いたる。
月寄を挽くおもしろい重かれ世にとやかまま有識(ゆうそく)
うきよ代人嵐月をやさしとまたものかき書顕すれば。
はしてはかなき嘆きやすみかれも縁ずて、ぼくへの
雑(けい)肋(ろく)なども顆(るい)しなくし。されば反故(ほんご)の如く

おのゝ〻この花を折むもなほけしからぬ本意
思ふ事ありてゝ
のゝ〻しきけ舞
享保辛酉の九月中旬述義、角駿者の筆
ゝ龍ゝ筆をとゝ

駿臺雜話目錄

仁集

老學の自叙
異說まちゝ
愚公の山
葉公の龍
矯狂警惰
鬼神の德
妖を人ゝ與る
年内の立春
釋源空の拵書
心の月
光僧の接木
扁鵲菜匙
忠孝の心
聖人の誠
飛騨山の天狗
神ひちゝの歌

諸道きよう人

義集

武運の稽古

天人相勝

鈴木某う歌

不吱不求

秘事ハ睫

仁ハ心の、うち

浩然の氣

民を王者の天

釈寂室の秘訣

善悪の報

貴乃浮世

勢ひの花一時

春秋のわ強そひ

佛よりするやう

義を心のきま

敬の工夫

富士のすそ野

天下の寶

禮集

天下ハ天下ゝ天下

枚田壹岐

阿閉掃部

巌寒知松栢

烈女種なり

天野三郎兵衛

二人の乞兒

智集

風俗ハ改の田地

直諫ハ一番鑓より難し

伴大膳

士の風義

多折手よ帰春

澤橋の母

結髪の伺ひ

燈臺もとくらし
法ハ江河のあと
けもの　草
渡邊番
巷時の色欲
足利家の乱
兵法の大事
兵も詭道
大敵ハよし
信集

運慶の仏傳
鴟鴞の哭
青砥の續松
大佛の銭
楠正成
武田信繁
孫臏ハ韓信の兵法
不忘向君

月々世くの歌見
遍照の歌
詩文の評品
六義の沙汰
多殘若賈
曇陽大師
言ハ身の文
尤物人を移す
駿素問答の話
所論の書よ
離騒の秘事
世をとゝ分をすくに
倭歌ハ感興の益あり
作文ハ讀書よ
文章の盛衰
寸鉄人を殺す
一日の澤
年よ
駿素問答の話ハ限りあれど
諸生の問ハ答ハ所問人よ

あの所論の文章をやしなうて齊しうして所向の事多端なりて一よりあるべき所記しるす正道を明らかに邪徒を辨じ・すべて学問の大綱を作り・又々世俗の諺俗近の語をいふて・平生の事よりして・観者の益ともなるべきうどもを採集し・記すべし・是まで不足なんわるくなるべきうわるべきあらん事情をもとり・其中の抵要の一法を揭ゝ篇ゝに分けし・鋪叙偏ヤく・議論複出するやうなきこと多もあまべきもの撰次をくし書やすくするあきば多だそのゝ結ゝに叙述をくし・家ゝ所ゝ是あるべし・図語たやゝ古雅ゝ書くこゞに世俗のやゝき俗を避るべし

事情を述べ・人聽ゝ切なるべし鄙ゝき俗語あるべし・そのまゝ用ゐ・擇ひまきべしまわ雅びゝ又近代漢字をもちひ・青ヤくたらねよくく・常語やすくわかる武家の盛衰ゝ武運やゝ以武士の我切ゝ武過といひ人ゝ礼論すべき我抜抜やゝ以事ゝ解地する我ゝ地ゝ以若又の義強を勤面と以山林の鬼魅を天狗といふ是ゝ丹顆なる我ゝ・甚ヤく謂といふ・今改ゝ及八ゝ又字我誤アゝとらのわ・號令ヤく流布するを始ゝとい・倘字ゝたゝ・觸字ゝとゝ強ゝ敢ゝいふを・ゝ字ゝ押字をもち

鬼邑等は因刻に誤りてかならず多し。安齋翁の論を考ふべく
といふは宗字をもちひ。種業の回をもちひけるといふは。畠字
をもちひ。伴語の人をそぎといふは。伽字を用ゐる是は回下の二字
を合せて一字として。寢の下走すればといふ意をとりて。白田
の二字を合せて一字として。白地の田といふ意をとりて。人加の
二字を合せて一字として。人の相加るといふ意をとりたるなど。又同
仇の兵をそかくといふは。味方の字をもちゐれど。一味の方といふ
語を略するなるべし。又家號氏族のものおかちえといふは。梶字を
用ゐ是は梶字を誤りて梶に作るなるべし。すべて此類は假名
をもちゐて其詞を考へあきらかにすべし。されど畠山梶原

などいふ氏族をあらはすには假名をもちひ難し。誤りなからん
眞名をもちひても。略すべからず。
雜語の中に引用る古語古文などしくは事實頗る多し。
その文字に對しては。かならず見るべし。おほくは謬
轉る。なほざりにしたがへば。又は首尾せぬ事もあれば。後に
本書を考へ考へし。なほまたふかく今老耄をつくし。精神も
足らざるなり。其の處を畫さく。急にて考へもあらはれず
必しも考へよ。考索せよとなし。善讀者あれば。多く
大意のあらはるまでを讀んべし。其餘は論ずるに及ばず。

駿臺雜話卷一目錄

仁集

老學士自叙
異說まちく
愚公の山
葉公の龍
矯理警惰
鬼神の德
妖人奥の
年内の立春
釋源室の折言
心の月光
老僧の接木
扁鵲藥匙を
忠厚の心
聖人の誠
飛驒山の天狗
神仙ちく人歌

諸道ものよみ入　類聚宝うの秘訣

駿甚雑話巻一

老学自叙

はらく身の過去昔を思ふに武蔵国あさかゝの郡に初く奴婢結びて詩書を業としてよろしきのこゝ或は撥を持く藩邸小游しおりも及を負て京師に旅食所其後小地に家居をしこの八常に儒学を修めて学頗を償て一生を終る事、城なるをうとも郷里に住年こゝろさるふ大家の徴を辱うしてゆくひ故郷に帰せしこゝ才老材腐て中のて立る首する死を待行なんと思ふ。されど多くの歳月を仰く今太馬のくひ七十にあるこの年にて。

学ぶ、我好こと道に志ざしと、人の師表となり、道德あり。
又あるべきの才材能をもつて世をわたるべきかい
なるべき事なるべし。他の我信じて、おのおの同学の人々よりも自得
自得したる事を語りきたるべし。後学のものよりもこれを
そ書くべきなり。甲斐とおもひ、病をつとめ
痛をゆるして、たえず書を講ずるおのおのわたる。辯え
て、宋儒の学問の実図をおもふ。唐中は程朱を学ぶに疑を
断ずべしとおもひ、前代の集をつくりて、俗儒の習
て記誦詞章をもつぱらとせず。多くは年月を曠しむ。或は怠惰
の非を悔ゆ。始て古人已の為まるの学に志あるべしと。不

幸にして良師友なしの中、諸儒紛々たる訓詁を賭
て、程朱を信じ、未終ひたすら定見なの所行をとりて又
ひとすらに歳月を経て、年四十よりはじめてわらず
こそ程朱に学ぶべきなるべしと。それより見
知程朱の書をよみて、心を満わ思を覃まる。今より手
筆作書をよむ。高くきれいに、高遠なる道を卑近
なる聖人、後世に必其言を信ずる。我に、天地の
堯舜に道なり。堯舜の道、孔子に道なり。孔子の道
程朱の道なり。程朱の道、我に道なり。我に捨て孔子
孔子に捨て堯舜の道なり。堯舜の道、

て天地の道よりもまつたく老子をもおもつて信ずるハ爭はぬ
事なれ共そこらの人ハ實見わかつて幸にて信ずるを一貴
見のしてさもなきをさとるやうなれ共翁ハ忽天地の罰を蒙り
たるを拆びたるなれ共庭中も聽を改むる氣色なし其時翁ハ
婦人ハ元ハ百年来論定なる事なれ共翁ハ此を信
ずるをわらふ朱子ハ後宋末に真西山魏鶴山元ハ許魯
齋吳草廬明に薛敬軒胡敬齋の諸賢とそしり其外
学にたゝかふる人ハ程朱を信ずるハ宋潛
溪ゆゑ百家を綜核するハ楊升菴ゆゑ文字偽
作の事ハ王弇州ゆゑ程朱を議するハ陸象山ゆゑ

絶とする事ハ我ゆゑ所ゆゑ世
術とする事ハ嘉靖ゆゑ頃ゆゑ世
と唱へ朱子ハ我排ゆゑ陽明ハ良知学
ゆゑ其他王龍溪ゆゑ程学とのみそしり世
学者良知ハ流弊ゆゑ窮理ハ欠陥ゆゑ其弊ハ嘉靖萬曆の間
ゆゑ天下の学ハ陽儒陰佛の流となりてやゆゑ諸賢の
罪なり是西山以下の誌賢命ゆゑ汙下なりとし所好ハ阿
諛ゆゑ其徳行材識つまり明者ハ英才ハ儒ハ
ゆゑ程朱萬分の一も及ぶ事ハ
をとゝ所ゆゑ議する鶚の鵬を笑ふ蠡ゆ

て海を測るに似たり。韓愈いはく、井の蛙、天を窺ひ、天を窺ひ、
とかやのたとへの類なり。後漢の桓譚、識緯を信じ、其新説に新奇
なる説多し。雷同尾鳴なるべし。されども、国家百年
の業、太平久しく、文化月に開け、儒・仏・道、鼎立して、其長所を取り
捨て、狂妄を嘲り、崇信して、ゆるき模範を失はざるを、
そのかたちとせり。ふたつ、儒仏ともに、わが国にて、一家成
る。花実をわかちがたし。老荘の儒いそく、其学、ふかんなる説。
猶狂の論を騁して、忌憚らざるは、一大虚を吐き、雄夫よ
き、戦和するおのづから、邪説横議世に盛なるを、ひとしく仏と
謂ふ。世運の屯邅、韓愈、仏老を排斥す。

世まさに猶狂を、戎排斥して、こゝろ、孟軻に比せしかども、
孟軻の説、書をとるに、天地鬼神臨之在上、質々在傍とも、
折言し、そうし、余翁ら、つれづれ、孟子に及ばざるまし、韓愈
うんぬんの説、ものいはざるまし、おれらの空言と、なるべしと、

一、釋源空のちこひ

ひし、源空上人、九條の月輪殿へ、一枚起請とて、今は新
長谷へ、おもむきて、其折言書、花翁ら、見せられ、そのうち
人々、念仏、念仏中にて、極楽に、生まるべし、源
空地獄に、堕ちたりせば、なんわれ、仏に、偽りし、
てちさ、我、仏となる、事、なし、吾儒の、いはゆる、折言

はとうげれバ人わらひ、うまとふかまかせりにわか極楽とか、する
なるを以父隨ニ、は地獄でかわり、ひく色ひ折言あらんも、と安る
ゐきわさわのかの前代ゆある殉死の制禁なるをしりおる讒
候此家殉死わよるこわまふみ中ゝ、そむきま輿論の行むし人
うやわまさん其家の老臣ともの其宅へ行く死をとどめ
申く許諾せずまし、いろ／＼とあしらへ今とぞれ其人やむるを得
まて一談しけまさらハ折養ひくよとふへ、と快く折ふさて八
人安しかく帰かりしく其翌日なつ、殉死の面く亡君の菩提所
へ皆相約して寄く聚りしに、日あろ知旧名墓をおしとほ出つる
て暮く色ゆこの老臣も行く上座しけるく、昨日ちのひしへハいざ

まゐく此事く讒言いでを憤乞しハ扨我も老臣ううらみて、其事を
あまり歎き給ふなれ、いく折ひを屓むき給ふへきに惜きあさ
この事とふハ其人ありく皆ら人を欺きけるハ仏ゆるし此昨日ちひ
やさるとゆへハとかく沢のうし、なく此度御家を敬まる為よとて
折養ひ其折を背く神罰を得ひとくも、死ぬれおやし今代わるハある
帰しくゆされハ死ときそれ分る身なく生えもおよわ折ひを
背いたる怪なく折ひゆとふへて、老臣おと事すましてやられバ
人の命を喪なく神罰うくる事を得く折養ひせつ
ま、深室し去るかあるしおく地獄おちる事をと得ことし
うくハ折ほうるめ、今宵の折養しそれまでく畢りハ上座し皇天

をいくしきかとの后去ぬ履く。天代よりけく折を折義をー
誠るこっ、天地の爲をうるふもどさまをく我道の爲ふ折を八源
をくも同ーくのこ、ぬもこ代をて、ぬも代教代の教、ぬをこ
實ぬ虚こするくわ、ぬ孫るくをくを有くせ代ぬ有ををくこ
虚を實くせ代ぬ実を虚くもうくこ。さまを代ぬ極つ地獄つくこ八
こわ、虚すの事ハ者まもをとすわ真俗一如をこをこ
衆生代教をあをこ衆生を等け八賢愚をわの代思ふ
渋ら代ずて念佛滅罪代中こ為ーてやこ代ぬ教迦如来の
密肯ハの代我ぬをくも誠ぬ代ぬ極ハけ肯を
互くんをとくくんく傳く俗中こ浄土地獄の法法こ代ぬる

来をとをくこ代今淫室の折をを相傳の肯の巳。九像殿代
せるくを浄土をとをくく原室の墳八を地獄ををくこ。さしぬ世を
こくく有ハ。虚をもくく實をして。完生を生死をを離さん
るををこをるを。釈迦のを者をこの面ハ。そをを八つをこの傳ハをき
ををををこ吾儒を誠をもくくを教化をる道をを。
雲泥のをくををるくこ。

異説ををるく。

わる肯、翁の病を同をくくを人くを待坐をを。翁も代ぬ代ぬをあ
代をを今をを者の新をを侍坐ををの新をを。貝代
くを居をくわひ行く肯代実代代来をを及ぬをを。産中一人翁を

むかしより。あるいは今の西京東都。おのおの世を唱へ人を率る儒者の流を唱へ。或は我国の道を教へ。とくに神道を教へ。とくもわ
ア。或は陽明学をとく。良知をとく。てらしあはせ。蒸かへ学
とく。新義を造りとくもわア。彷彿実用の流まちまち。
いづれも。そもそも。ひまを費とせん。翁はんくおのく。いづれ思ひ
あれ。義をいく。当代門戸をあらそ。実践を喝するもの。
今ようさりこの流をきもく。行ひ学を言ふ人。まもそ
而思わるわく。行ひ学を言ふ人。前うの古く。庠序を
いづれもさまく。行ひ学を言ふ人。一原なるもの
なるその一原のとあるなさく。情ぬきばかりの国の道と

て人の国こうはいらべらば。良知の流をくく。窮理をこうるがら
す。鄒魯の学をとく。濂洛をたりまぶうべ。孔孟をおうハ
聖賢の書をあア。聖賢の書ハよくやをつらべ。さまざま志
を遂くほくよりあるこて。おのを成得るの道。今の
儒者。おのく自高ぶりあアて。濂洛の書をくりく。讀
人ましなるいはる。程朱の学離れ窺こ。已の人成
をあるく。おハく大賢を議ぶ。不思の見地を始くさ
思ひ。真学の粕滓。深浅なるめ。そもく
さるの人々孔孟の書をもくはく。讀ばハ。孔孟の
を得ざらん。孔孟の言を得べいく。程朱の流よ

新なるのみにあらず。殆んど程朱をば非難もせず。議論する事一定せざるべし。元は孔孟を尊信し、新をさわるとも、孔孟を二つなき聖人と尊信し、そこを議論する人は、程朱を世代ちがい、明朝にも、或は議る人もあり、ほんの毛遂の、世の凡人成ることなり。一定せざるべし。又こゝが通俗学術の所見なり。孔孟よりは、全く及ばぬ共、悪しきまねをせぬ。程朱は、今程朱を議るは、そこの質ばかりなり。程朱は、孔孟を信ずるもの、許さるべきなれども、孔孟を信ずるは、我国の学者の撰ぶ所なり。孔孟の類なり。共いえば、共いえる神道も、仁義の教なり。

わが国の人、知と云へば、共況を、きゝに、仏性を明徳と、義、礼、義房、辞度を、智、仁、義、礼、士と云へば、共いえる良知、良能のごとわらざるふやわれん、古学と云へば、共況をきゝに、大学を聖人の書と、わが孔孟の道、二ツなり、共いえる古学は、徳性なり、わが孔孟、共況、ひとつ、翁の銀をのまんとて、にて、伝、仁義と、内外を合せ、今、道ずらを、程朱、学なれば、大中、五正の道、孔孟の、心、流、なるは、なるの、実、論、わるべし、翁の、物、思、程朱の学をすれども、力をもて、踐履をせず、一、多、議論をのみ、幸とせば、学は、いかも、道、なるべし、物の、得、すべし、明、知、共、義、

わ[illegible]陽明も支離とそして学問と譏りしぞ邪説の起る
[illegible]聖賢の旨を忘れ空談を説くのみ。実行を忘れ空談を説くのみ。
なり慎むべきなり。今文筆の事新しくやかまびすし。

心のわざ

産中又[illegible]の翁の作らるるあり。吾党士は相戒めて
実行をはげむべし。邪説を距ぐ上策とやなす。
孟子の言に楊墨と距く好辯の譏とは辯ずるなり。其要は
編じて君子は辯ずるのみ。況や今儒学の
辯の作[illegible]あるは葛のごとくそひ繞む。邪説妖言の説は

[illegible]る本末のごとくもげ[illegible]それ[illegible]雑説を費や
さんや。吾道を説くのみ。作るべからざるの事なり。
[illegible]ある儒者の作とて耳を聳るるを[illegible]
わるべし。聖人の作を作るべし。又[illegible]事物面倒の作よ
りは[illegible]文雅風流の[illegible]又[illegible]五倫の内夫婦のごとき
ぞ[illegible]天性なり。君臣父子兄弟夫婦の類へ人
の性なり。聖人の作[illegible]其作者聖人なる故
古今[illegible]変[illegible]邪説[illegible]
[illegible]と市[illegible]
[illegible]洪賢[illegible]東坡の月[illegible]の説

を見ざるものなり。うまれながら盲たる人あり。日ハいかなる物ぞと問
て。ある人こたへて日ハかく圓なりとて。銅鑼を探らせければ。
銅鑼をならしきく。さてハ日ハ聲ある物とおもひしに。又ある人のいふ。日ハ
日ハ光ありて燭のごとき物なりといへば。おのれさぐりてしりたるにもおしへくれ
ければ。そのおしへのごとく手を寄て燭をさぐりし。さて他日に籥をさぐり
長き物をさぐりて日なりとおもへり。今此世俗道理にくらき人多し。なまじひ
書を讀ても道理にくらきまゝにて。ついに人をして人に聞てしるわ
ことも人の言をきゝて待ける故に八その盲たる人のごとくにて。いかなる
おもひも空にて。ひとへに此人の日をとりし如くに。かしこきにあらず。盲の云る
ことも同じことぞかし。今ある人のごときハ。空に見えおもてなきにや

むかしよりいふ所なり。あるひハ喪心の人を相手にして是非を
論ずるに似たり。その論ずる人もさぞあらんと聞しるのみなり。然
れども。翁さへかく此說の起りを考るに。其人ハ記誦の儒
なり。記誦の儒ハ諸子百家を涉獵するをもつて。四
子六經さへ手よくよむことかなし。ただし其文辭訓詁を僉議し
て。理趣の妙なるに及ばず。然るに自らわが學の此義理より
きを得ず志らず。飽まで己が博學を自負して虛誇を要す
れバ世も亦是をとく推崇して一代の儒宗となし。明李諸儒の
風大抵かくのごとし。されバ放蕩不遜にして人に驕り傲
りを高致として。好んで大言を吐き先賢を毀り。抗衡して高く唐

宋諸儒のよくおんとなし。孟子とそしり有識の士は学文を
荀荘の俗毒をそしり。文をもつて王李の浮華を指摘せられ
バ己の臆見をおのれ道を天地にあらしめ。事物毒害なく
わが学をもつて己の曲学をもつて今世を文雅風流のなかに己が情
をもつてして。吏胥の弄をもつて偏人の性をわがままに命ずる偏
ずるがごとく。なほ。うつ世俗多くあるを信じて。辞を色信とな
まつ事をもつとかく世を奇怪をなしもつとかん今文異事作為
人の心術を害し。世の名教を損ずるあるべきものなり
ゑ。周礼を造言し刑わるをこの所なり作るべきこの所なり翁
ごの通俗もつて材力をもつて拙をもつて文むとする。孟子大度の

一本やもつあるべし。名を孔言に距き。辞して聯くとも。名きの信
ずべきに己の量をもつぶるの議を。身をのつまるべく作るあるべ
狂者共作をもつて礼服なるべきを。宋人の章甫を越に貿
うがごとし。断髪の俗をもつて国をもつて狂者共作を天下の
名曲をもつて。郢客共陽春を楚に唱ふ作るべし。駅吉共俗
を和する人は。精々。そく。知我の人は我心憂あるとなり。不知我
者は我何をか求むとなり。依々。ある蒼天。ゆゑ。人をもつて詩を周の
吏周家共書をとるべし。作者を善道共書をとるべ
し。幸にそのそまとなるべきをもつてなるべし
愚公の山

さきとどこし翁ごんこそ知己と一世くやとしおもひ侍りぬ。青年邪
僻妄談すして根とかなさ事のさんく世に行まくわかのうづ海
しくきまあるを。女帝崩の一時とやとびき大つるさきにのぬるのよ
こそ。世と歴く西道へうるをしらぬわの。ちのをを心無くして。
ひく其験とこんもやく思ひを未錬のおとらしびて。法君列子ご
書とひ経へひや。五公やくこれ一人わひとれ。ち君ちく山の
わひとこれくこと。移さんとく。日こまひごとしらがく書
ちんづら来非とひとく一貫ちあ。ち果をと。智叟くこ
しく見をくこう大なる山とあつかるくの力やくこびくとく
こびちくさらびやく其をを第ち年ち五公をてひの

代なるこびちをあてひの五代やを後くあびちらの孫乃
代をと又其代をと後くあびちの孫乃移さぬを
やわらびをやこへひく第ちれとやこ五をわをとこわ
寓言なるこへひの人わるをこ五公こうなるこ
世とこわのひやこへひ五公やを名作をこ。智叟こうあるなる。事ハ
世と智なるをとこへひ智叟やを名作をるのし。おの世天真
事。五公こちの五代ひをくと一ちびを無ずべ。移こ世と
智なるをと移する行の人を。大こと智叟こうやく。五公の山を移
をちの事と用くハをの五を第ちれとびなのやの五代成
移せわなるこ。ち五世と五を第ちれ五を智なるこ。世乃

いとゆゑ賢ハ及ぶ所のアらそ。そもそもおく御寛の世代都にて
このくハいにしへ今翁と百年倫定するも只代分落ぶ
行末ぶ世の明智ゆる人ゆるとて翁の迂闊なるあとと給ひ
さまざまに老ひのあるあれわんぶ志をちく所を後ゆんとあそ
思ひ給ふ通公の山城移す代歎やうぶ

老僧の接木

さまざまぶそこ仕ふまく思ひ出し、幸わ思ふ思の晏わ
のさとぶ一乃院ぶ記ゆんの真言寺おひ翁ぶと愛な
うゆ思ふ其住僧を尋ぶ幸ぶ行て木の実ひろひ
やぶして接ぶの住僧ぶ人ぶ出て前住の時代事とゆん

僧ぶ成ぶ住ぶ。寛永のあろ代事あゆん。
将軍家谷中ぶ御寺物のわぶ時代ぶ徒歩あゆ
あれ遠ぶ代洗ぶ行ぶ者ぶ渡ぶわぶ
ぶ代ぶ其時代住僧ぶ八角ぶ及ぶ年ぶ
ぶ代ぶ接木して居ぶ代住の人ぶ
側ぶ二人ぶ人ぶ代ぶ代ぶ代ぶ
ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代事ぶ代ぶ
し代ぶ老僧ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ
ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ
ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ
ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ代ぶ

[illegible]上意あるべし。老僧は第八雑人
わかまいの人たのさ幸をさきたるものゝ多くよくあるもわく見
給へ。今は本をもけぐさてしおさ[illegible]後住の僧さ[illegible]いつまでも
大さくわかるゝねがひ。如八林と志げる寺も正さかのれと我々
寺の高をかるもよくすれるものゝ。おのづから我一代僧
ぐさ幸つかへ。それをさきあつて。老僧ゝ[illegible]実
[illegible]の[illegible]感あるべくかそ[illegible]の行さ仏性の人くなりく事
[illegible]。仏祖の法も多くはたとえれば。老僧ゝまたん僧ゝ大
[illegible]おもまて。奥へ山を入れ[illegible]とはめ出わるく。あすど賜ゝる
[illegible]。いま八翁もゝ老僧ゝ。接本さるおくく。老朽ぬまとゝ。

ある限ゝ篇号をさハゝく。人ゝと僧人書ものあ[illegible]て後世
よ[illegible]ゝ。心事は困くゝ。[illegible]おもわゝ。は[illegible]なゝ萬万助と
もゝ[illegible]ゝ。[illegible]死ゝ[illegible]。古人のいゝあゝ死て
ゝ骨ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。我身の
多ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。

葉公の龍

ものまでもゝ[illegible]。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。
ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。聖賢ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。
[illegible]。多ゝ載籍のゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]意を得
多ゝと[illegible]。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。

林慙澗愧
宋の孔徳璋が周顒といふ偽君子を譏りたる文句

日ごろ志をひるがへしてたちまち我を忍てつゝしみなき事わすれたるもの
きやくらうやかの山の霊にいましめられて、さはぎたる事わすれがたく今や
事にしかり偽りかの林慙澗愧をつくりとかれ、又かの周顒をくるしめ後
世を待かべこあやまりし業公謗を招く其族を責めしむ　日東
を欲せしが、わる時真氏謗をまねき聞く忍の実の謗をうくへ
きかゝる事を蔽わるべし、行のむかしをかへりて人の心
わひかの人もふうもひ窓ゆゑに額をさし、今あまたの書にもかに
そしまうくしおしけれどもひとへに今東西南北の儒者とよばるゝ輩を評
するに実用を志ある人とあるべきなれども大かた自らを実行として
師儒と称しけれど我ら聖賢の道を好むやうにいへど　猶狐鵠

とほらは著述を衒ひ名をとらて世に傲て名を狗くはるを欲
とみてよろしき道を実得の功なきにより真の聖賢をわすれて因
をくしてて柳是むとして是非をさだむ八日了孫聖賢の道を好
むなり、いかなる業公の謗を招きし申しそ、長、晏嬰の仲尼を毀て
蘇軾の程頤をそしりし、考へ是非を捨べしむと、斉の賢人なれども八
宋代の名臣なれど、此のともがらにしてまことのそしりを、況や二子に及ばざるもの
をや、されば漢の揚雄道徳を論じ太玄を著し、一代の儒と、いへ
ども、かれは一旦賊莽に仕へて節義を失ひしかば、うしたた
とひ莽の世を去りてしれざることなり、是等は学問ありて今とし
孔孟にかへりて節義のちからを事をもて責らるゝならば必ずさけねども。強く

太平記などいへる虚文(らうさうぶん)にあらばこそ、後世其子孫(しそん)ありて我をそしらんといへど

後世其の太夫わかくして知音多かりし。其の所く言論のことを聞て

その實迹(じつせき)をしんずるなど、世俗さぞ（けれ）鍊(れん)といふべく、何の事ぞやと

みな八人信じかたきものなれや。二千年前のことなれば、かの鉛華の

國々枝葉の何かしらく聞たる微賤(びせん)の士ありて、東(あづま)の人と

く相知りしが、其子九十郎といふものの十ばかりの時、父をうしなひて

引取り後、其後は年寄同じ程なる年輩の人の子と圍碁

のごとく口論し、九十郎は（こ）らへ次刀を抜て相手を一刀

さしとどめて其人を本人にして、其年歴(あらそ)ひありて後、相手

の剣療治(けんれうぢ)させしよしをきく。其間九十郎は官長の家に預け置

さらさらに此の臆したる気色もなく、言語ゆたかなる所の

義は[illegible]年月にわたりて[illegible]相手の[illegible]

剣をして果は九十郎も切腹する議定しければ、彼の兄此

兄弟も今名跡をおしみて、酒肴(しゆかう)よく入りてまてなしけるに

九十郎母への文など書てのち、是まで主人に向ひ謝詞(しや)どのべて、又此程

隠居なる家人へ是までとて暇乞(いとまごひ)なんぞいひて、[illegible]

ゑ、面々へ名跡とおもふ故に、此の身をわたるまでとし給へと、[illegible]

わが身切腹の時にては、ハ、ことを存じ[illegible]生きながら[illegible]

面々は是非なくおもひて酒をすすめければ、奥へ入りて高鼾(たかいびき)し

て寝入るを聞て、跡に居合せし人々感じあひけるとぞ。又の日はや

めでたきことをきゝて。沐浴し衣服をあらためて。よく〳〵心静
かに其後切腹の席へいでゝ検使へ一禮し。手ぎハよく切腹しぬ。
其有様従容として。やさしきすがたながらも勇烈花切の
ちからといひも見事を遂ずしてはなかるべしと。其場に居合人〳〵。
年を經て後までも語りつたへ。涙をながさぬハなし。此ものハおさな(き)時より
翁彼が父のをしへハ文やすく。あらすれども。九十郎を思ひ切
腹するに及び命をもをしまず。此程のおしへなし。さすれバ未熟なるが為
ならずとて。人を真におしへべしといひしハ。その心ざしまことに漢くおしへハ
父ぞの恥をも人にしらさで。いはひて其身をもつくるべく名をなすに
年まで人々すのまゝに。思ひのかゝるおもむきハ見ゆるとも知られて

むかしハかゝるきびしきことも。儀よなきことにして。當代なる事ハ似もやらぬ
ぞかし。その子どもハ。よく〳〵年まで生らへてハ。いさぎよく切腹しける事
いふまでもなく思ひ侍るといひしとて。古
人のいふごとく。此父がいたハりし此子わがみじかき思ひ侍るときこえけるを
今やすし。侍るハ九十郎がふかく思ひ。こゝろ歳かさを似せしてけるぞ
おもふに世にさかえ侍る人ハなくて。果なんハわけなき役にたゝ
ぬ事なく侍る。其主人ハ翁をとしめ。言偏文字なく古人のまことを
しらず其の實のあらためし時をまなぶ。日あるのわらはべどもの
ひわざハ見おぼえて。こゝろえべき具なるべし。少年学問し
て儒者といはるゝ身なりしの。童蒙むちの九十郎が覚悟よく

おとらぬきさまのハいやさらぬ。しきりにわるくばや。信者常
よりと楽してゝ。くゝ有こ称ゝへし。

扁鵲某甚とゝ

他日の今ゝ翁いつも。世一日学術の邪正を論ぜしゝ其論
いまゝ盡さるゝよ見え侍る。今日其論を呈しゝへし。今世儒者
朱子と議すゝ三等わ。先一等て陽明良知の教を称ゝ
て朱子と議するわ。陽明ハ傑出の人わ。朱子ハ学を毀て
支離とするとおゝ。いまゝわ。とゝ由ハ朱学ハ
名ハ文字を伝ゝとゝ。内省の工夫やゝ。すくれぬ。朱子
格物の教を義ゝ。良知を標的として。一向内省よ

ばかりゝ。むゝ。其実ハ。ハ。ハ。朱子ハ格物
の教。良知ハ。ハ。ハ。陽明の教ハ。ハ。ハ。
ぞ。孔門の教。詩書礼楽といくばや。詩書礼楽。事物ハ。ハ。ハ。
と不忠ゝ。信と不信と。必事物ハ。ハ。ハ。
ひとゝの良知を致ばくゝ。ハ。ハ。ハ。
うゝ。ハ。ハ。楽を学ゝ。ハ。ハ。ハ。
おのぼゝ百行と脩ゝ。忠信ゝ。ハ。ハ。
ゝ。ハ。ハ。聖人ハ。ハ。ハ。

かゝく迂闊なる教とあて作べき且人良知を後とし事迹とも
てせらるゝてなのみなとくなとを心宅くく内省をやまして私欲を
さらとゝく良知を後とすれは外物はそれは自分をとゝ外物
をとゝ耳とわアし耳をもて五聲をきゝうして外物をとる
とゝ目を色をとゝ目をもて見ばわアし目を色をこゝろとゝ外物
をとゝ口を味をとゝ口をもて味をわアし口をもて味をとゝ
ゝうして外味をとゝ口をもて味をとゝ耳を
わアとゝ人ども外物わアし外物とゝ耳を聲をきゝうして外物を真
をとゝ人ども外物をとゝ目を色をとゝ目を色をわアとゝ人ども外物わアし外物
をとゝ口を味をとゝ口をもて味をとゝ口をわアとゝ

人ども外味を物をわアし五味をわけてとゝ外味を真をとゝ
ゝうして況や五聲中を清濁物をとゝ異同わアし外物中と
清濁物をとゝ異同わアし外味中を厚薄物をとゝ異同わア
其物をとゝうして人なわアとゝ其別をとゝ
もし兄を敬ずして弟を敬ずして
の事をとゝ兄を敬ずして弟を窮ずしてまづ居其所行皆
なるとゝ其事を所為とゝ其所行を窮ずして己の若知と思知
との知をとゝ知とゝ人わアとゝ孝を所行の事とゝ人ども
く事教をとゝ行ども朝者昏定やうのことゝ事
教の人をとゝ知とゝ人ども田舎農家の

民なすべき親の人倫の道をあらはす。孝経者百行之源
定むべき事ともなるべきなり。況や親を敬ふ孝は
ともに體と事とあり。志を養ふ孝は
やはらぎ厳威儼恪は事親の道くわしからず。其外父母のおのおの
順言不称老耽酒の類は及ばざるといふ数ありてなべて
事親のうるはしきを即て名其尚ぶべきはそ
なるべくわがもの親のみをやしなはばなり事にたとへ
あらねばいくばく聖人のよりてさとりあるべき事
よわるべきなるべしやらくは孝の道をたくさんわのくわくもなく又
くはふるべきを不孝なるもわるべしこうべとく事親に

とやめてなるべきなり講せざるいまもわらべ又先生の理
なのうべく究めはは事親なるべくいとまなくわらべ
事親のよわくは其事の尚ぶべきはなり又は積書はなく
ト聖人孝を論じ作ればくわらべ及僕して其理趣を述べ其
事をさくしべし。そもそもの事をとりて明して志ども
則格物の学なるべし。つまり志を尽くしまはべ道理純熟
志を落ちわつ事親の人倫をもとして親にたるべき其道と
にくさべといふなり。そも程朱格物の学は物庭をかりて
力をあくまで用ひくわるべきは其味を志べしべ事親不学は
てもらも良知なることといはばくわ孝経の人学をもとに一わ

[illegible]して学ぶべく其量を広くせんの事なり。不学は
[illegible]ことなきあるべしと。今学者共の弊を弱んず
るに格物窮理を廃する人、学問を[illegible]ざるのみならず、矯
枉過直やいかんぞ。[illegible]第二等は、理気體用の
[illegible]孔夫子言及ぶべからざると。[illegible]して学者と議する
わざ。[illegible]孔子性相近しきの作[illegible]孟子よりの[illegible]
と編し、[illegible]夜氣の[illegible]唐虞三代の
書よりの[illegible]の作ざるべし。
[illegible]家法先生、其播の聖人[illegible]して毫髮の疑き
[illegible]

[illegible]況や程朱共時、孔夫の世を[illegible]
と遠し。言を撰び篇を[illegible]道
[illegible]
蹈襲[illegible]今学者共孔夫の作ざるを[illegible]
う考へ完ぶ[illegible]
[illegible]
[illegible]孔夫の作ざるを[illegible]
[illegible]学識の浅陋な
[illegible]
[illegible]
の況をわ[illegible]

このわたくしの氣質はなはだ流行し、万物とまりて、あのぼうやぼ
ろ則天通かの子ふ昭和をしてはんこるる無アのるわたを物をと業
一等とこ敢為かるこ敢為をとあてこ氣こ配して空とする八隱逸こ
ちうしとぎ共伝仙こ銀八彼ゑ限こ伝おかるおくも先儒の
中ゑ先ゑ類しあるる銀雅わアこ銀ぞう。そもそも八業ゑの云伝
始のく考へてわる後銀と免ゑとねといかくわアこ伝伝彼ゑ一恵の
見をとくく臆決するあるこの幸わをわアだものおよる理氣義後の
伝八微妙かるる幸わく一方の作ゑくこ伝置こ。義をばうこく
老子の流をとアこく。あるくをとてこぞうをとこ作伝車をうぞ
て車かこ。業をうぞくく業なこ。あるこ八車を業こ。そ八輪

かるアこ。そ八軸かるアこ。そ八輻かるアこ。輪をとて車とする
うこ伝。独をとくく車とするこ伝。軾轅をとくく車とするこ次とこ輪
をすて独をすく。軾とすく。轅とすくくこ八車もとるとよなく
かるアこ。かるわ。車の理八車のおかるよ定まりてわきばこ
そ。とこ代車のかるアこ。車とハ作アこ。おるこ。今とくく車道車
を作こくく八輪を斷アこ独を斷アて。仏呵くこ伝車を作りおを八
車の理常こくこびぞくてわるおるぞきをよこつをて作をおるよ
わ殺ぞやそをよをて凡ゑ車八輪軸をこ出る欲。輪軸八車をこ
おる欲。車八輪独ゑ出をとこ。こ車の敢わる幸をきアこ車の
理おるこをとをこるきをばかアこ。業をとてあくくこ同ぞるこ。

十二時と云へり。三十日を月と云へり。十二月を一年と云へり。光八時分なれば光八日
なれば光八月なれば光八年なれば一つの年を八年と云へり。故に八年を歳と云へり
なり。然れども三百六旬有六日と云へり。六日と云へり。歳と云へり。
八年を一定して初めて日月と物事とを運ぶべきなり。
されば上代は麿とも作れり。今も麿家と云ふ代の麿と作る。旬編と
て。只今やさき日月と考へ。歳百載後百載の麿と作る。毫髮
とたがはざるべし。光その法は月よりなれば月をよりて常
に存ぜざるべからず。光その法は月よりなれば月をよりて常
ぜざるべからざるものなり。天地の志極とかたりて四
時とし光とよりて物を光とよりて生ぜざるべからざるものなり。天地の志極とかたりて四
時とし光とよりて物を光とよりて生ぜざるべからざるものなり。車を云へり。車

なり。歳とうぞ〳〵。家なれば氣とうぞ〳〵。家なれば氣とうぞ〳〵。家なれば氣とうぞ〳〵。家なれば氣
もなり。方所とは方所とは。方所とは。方所とは。方所とは。方所とは。方所とは。方所とは。
故に孔子の曰く上下とは器を制して道と云へり。器を制して道と云へり。孔子の
先後とは氣を制して理と云へり。氣を制して理と云へり。今其
本源を尋ねて枝葉のよろしく儀備をまぜ。彼此異同の
如く底極のあるべき。體用の統も亦考へ。道に用あれば必
體あり。寂然不動は體なり。感而遂通は用なり。されども存して
養ずれば體に即て用存し。動に省察すれば用に即て體行
こる。光と體用一源顯微無間と云へり。孔子の敬以直内義以
方外とは。孔子の思の中和とは大達道と云へり。孔子の仁義

とゝて正係大道といふ。そもゝ〳〵同一理なり。體用をいふとも
もゝ。ぐまこの體用よりわかるゝもの。彼典籍に徒僅〳〵て得小自
足とする人ハ道に全體大用あるを忘れ。ゆく為ぞ
あゝ〳〵多し。第三等ハ放蕩を貴び名検をいとゝ。世俗文辭
典籍をそなへ。一多ハ程朱義窮理の法をきゝて。腐儒ろ
常語とく。根ゝ嘲笑ふ。程子若脩已の道よりおそ。辯ぎ
ゝとし。せこどそ。その議論をきゝ。不急の案を用の辯。繞〳〵て
人耳を喧ましせざるハなし。かゝるとうゑ挙て。いとまなき者の学
よりも。多〳〵者身に付てやゝなし。ひゝ扁鵲齊桓公の疾
を見て。二度びこれハ及ぶ。そもゝ療治

のよりうゝ程ゝ。茶毘とすゝ〳〵。驚るをもとき。俗事に熱もの
ゝ〳〵ハ桓公の疾ハ骨髓ゝ。ゝ。儒〳〵扁鵲ゝ。
療治のゝ。況や老子非才学智の身にて。仁義道
の術をとゝ。多〳〵を捐て驚乾〳〵ぞ。

矯情を警情

義又ハ少。當代東西兩教の儒を。人ゝ。一
樂中を偏じ。多くハ異端を好。名誉を要する
同じ事
同〳〵ゝて。其病根ハ又異なる。大抵洛陽の儒。驕情の弊
あゝ。東教の儒ハ剽狂の弊あり。洛陽ハ風氣和。土地狹
ゝの。ゝ近ゝ。其人の儒。ハ温厚柔謹ゝて。

制行公し。威重わ[illegible]て人望と失ふ。[illegible]温柔
要して惰弱とわ[illegible]。威重要して驕矜とわ[illegible]。空談を尚び
文史を捐て。[illegible]て用うる尊大わ[illegible]て。[illegible]遠志時敏
なるを[illegible]。[illegible]八良士用意の方を。[illegible]通
と容易わるる[illegible]。[illegible]八先賢を慢[illegible]。行業を毀
[illegible]。[illegible]八[illegible]。宋弑帝の高貴の葛燈龍
麻蠅拂を[illegible]。罵く田舎翁とする。[illegible]宗大業を建立せ
[illegible]。[illegible]。史記蘇秦
[illegible]て洛陽負郭の田二頃わ[illegible]ハ。

豈能佩六國相印乎とい[illegible]。實も[illegible]とおもひ。今
洛陽の儒大[illegible]土着[illegible]安[illegible]て。隱居放言自[illegible]。
[illegible]共人[illegible]て世務[illegible]わ[illegible]。一官を[illegible]一職を辭せ
[illegible]。[illegible]共任[illegible]。[illegible]八洛陽二頃の田業
[illegible]。懷居求安の[illegible]
[illegible]等の人と聖賢の志と[illegible]。東都の儒八又[illegible]異なり。
[illegible]風氣[illegible]。古世[illegible]俗吏共況[illegible]逼居[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]
わ[illegible]。[illegible]八文飾なく質直なる[illegible]
[illegible]。放蕩淫奢德義を銷刻。浮辭恠說文字を造作[illegible]

八蘇秦の洛陽宿執の言ハかなるまと世く游説するハ縦横捭闔傾危の道なるをおもふ　さまでハ今天下の学者惰弱なる剽軽なるハ二病除こさしハ高談性命博究群書とも聖賢の徒といふへ横渠先生もそなたて学者の要務とさるへハ編輯警儆の一法を挙てあるされ惰弱なるハ義ハいよ〳〵志なきにあらず郷愿の人となる剽軽矯激ハ忠厚のたりなきにあらず　繞侯の徒ハ隔靴搔痒のこと有ていへハ　すなわち士なる者の頂上に鍼針なるへし

忠厚のたり弘

これハ士ハ第一忠厚にたりなくしてその人となり惰弱なるハ材美なりといふなるへし　翁日なる樂毅の伝をよみておもふに　毅ハ我国のたりなきにあらず　学を問わて道なりなりをきくの人なるへ　志なくして学を問わるなきにあらず　樂毅燕に昭王に仕へ上将となる齊を伐く七十餘城を下せり　ハ非常に大功なり不幸なりて昭王薨し　惠王齊の反間を信て将をとの兵権を奪ひ　毅ハ毅なりて　惠王の大功をすてゝ　ふ益をさる見幾而作不俟終日とかなるにあらず　趙に燕に伐しるを毅謀なるに固辞して其講く所の義次

流に忠臣の法ともなるべき事の惠まる報する書をもて忠臣其人言かに謁絶あり。我國反復の世に八空谷の見るとゝ行るなるべき書中に君子交絶不出惡聲忠臣去國不潔其名といへり。二代の遺言なるべし。学問なりしてハ雖ども其言の有る事を考へ人を解使べし。交絶不出惡聲とハ名を交通して其人の惡事をいくらねばもかくよりの事なり。其人を中傷して己の己をいとんとく其人の非をいふべきなり。交絶の後に其人のよき事を一向に言ふべきなり。君子の忠厚人に厚きなる為なり。翁其言を謝作るとく。

かくのごとくなる人の多きなり。其人ハ葛の蔓のごとくなり。翁ハ葛の蔓なるなり。今文翁作るとこゝ。伊川先生に感服する。程頤の姦と称し又衆中にて嘲て。麤糟陂裏の叔孫通なるとこゝ。伊川遂に東坡の学を非を一言の論ひしるとこゝ。洛蜀の二党いつまでもこゝ。邪なる。いとゝ長て。邪怨初ハ伊川に従ひ学ひし後に伊川に背し。伊川を論せし。八人同て伊川に背し。伊川の給ひ給ハ故人なるとて情厚しかるとも。新法の人なるとて、さらに不平の辭色なるべし。元義に落に

吾儕の所法とすべし。忠臣去國不潔其名とかつて忠厚の事なり。況八人に多くの君と義絶して其國をさるべし。わがの
ちふ君の道をしるべきわけもとこのわやまられるとかつて一
分のことを潔うせんとすべし八君臣わしらなれゆべわの名
よりもし自ならわ。わしをやうみてあるとかつて。況忠臣
のかつて。翁加賀くわつて。時。秀吉の老人わつて。其父を陽寺
たる平次と云し者。長秋の戦。池田勝入のつもわく戦功わつて。其
後天下泰平よりつて。大坂義城の事をさべ。所仁政わく就候
の國くにのるるをいゆるわつて狂。戦功わつて士なる。已の
多しわしるを云多くくにたるべ。たる実一生已の

長秋の戦
天正十二年豐臣秀吉と織田信雄との戦

長秋わくの戦功をいくたびて数しるものよ大将の敗亡しるの
よ。其多く屬しるなるの已の戦功をいくふわらたると云と
ふつ。已の戦功をいくふ。惣勢の敗軍を大将の越度なり。
一ふの云ふけてのつわく。恨のくわつる。たる実そこをおとるなる。
古人忠厚の餘味わつやさしきるわつて。其戦功をいく
ハたるうよ考つたるねくしく。

鬼神の德

ある日謙遜く後。五六軍踊くつるたる。おのく鞍岡よ及
ぶ。中よ初めつるくしるたるの國まるせ度るたる。我朝ハ
神國とくいちるきるの世よ神通とくくハわるくいれとて。

いつまでも其徳隠怪なりて正理を得ることも是なく偽ることも決して
ものの鬼神の位を聖人と仰ぎ祀はのなまつりは我なるものとき
所識の人ならずしてこれをもて多く其うるべき事なれはなり
さてこれを治て他日の功業の權とするなり所謂各同しくするよ
蓋ものは人倫をもて先易をもて聖人以神道設教とあり聖人
の道は神妙なるものなり神道といふは仁道なりと先
初ものの道とするなり所謂神道とは我国
の道とは聖人の道なり一等多きものなり
別なり抑鬼神の説き道理なり所謂とも
日ふるは是なり是なるものとかたりなり中庸は鬼神を

為德といふは人倫を教へる朱子釈して性情功效といふ
は德なり義と釈してうるはしきなり其德ある実なり古傳
に神を聰明正直なりて壹なるものとあり其則律の德なり
なるは神を正直なるものとして人作も志とも聰明なるを
さて人神ちなるものとすべきなり其人は耳をもてきけは
耳のおもてれなるは聰と聰とは明と明とは人目と
とく行き人間の及ぶべからざる離婁の明といふも人をもてあるの
人なるもて思慮すれは類悟の人といふもやはり猶豫あるべし
神を耳目とするは思慮なく洗心真正なる感一真誠の義と
見なるものとなるこれなきこと一つの心体をもて体と考へ

されバ天地の間にきハやく耳を掩く目をやき地あらでバ何をとし
わたる事ハなせれ右のように現在し端的に往来しあらゆる物の
體となりて盈虚の盈ちてわまるハたえるなく形もなく聲も
なきものハ人の見聞にハ及ぬ所にして其誠あるものハ感じ感ずれバ
通ハ誠ありて是ハ感ぜれ感ずれバ通ずれバ通ずるものハ忽ちあらハれ
なハみのほど、るかなし。よつて天地の妙用にあらずや。中庸に視之
而弗見、聴之而弗聞、體物而不可遺とあるをはじめ、昔西
行法師伊勢の神廟に詣しとある歌に

なにごとのおはしますかハしらねども、かたじけなさに涙て

あるハなにごとのおはしますかハしらねども、かたじけなさに

てらすよふなや御かげをおそれ奉りやや是誠の感動にあらずして
て何ぞ神あらずして其人従かのごとく一筋に信ずるものハ仰も其
のあらず感格して、ことごとく感動する程に信も奉りし
ものハ人に信ずるものにて其神明の心をもつてものゝ心をまさま
まのこゝろ人々しからまハ一ツ神に渾融して神と人と一体なる
ものと人かるや空空やなおのよふなきずものゝことしとあらゆる
ハ洋々乎として其ところにあるがごとく其左右に在すがごとし。
是神のあらはるゝ所ハ其の誠あるべからざるなり。さりとて
神を遠き事とし四ツの時の御をの心をまかせゆるべからず
いへるも神明の舎なれバ一毫も私欲の心をもてバおのれ

このし三五色の神明と同氣相感してすくハ一ちじろきぞかし。但相
感ずるはすなはち天下の民なるも、愛ぬる所也。律なるを和らぬ時ハ、
このく涙あふれて、その事にいけなきわろくさ見とめて、其極
相感するはかまといふことを知りぬ。今名は申す。多く躬の省
み内を求めて、天地に遠くも行ゐて下学の功積くと上達
せらるゝべし。其何ともかく只今翁の申すむ、さてこそけ給はず
みくなりと思ひ給ふ。終ちるとく、其教やうなるに庄中良久く
物りなかりしかる事のなくわりし、翁のげ掲るゝやとふ事もなく
出たる御誠に西ちの說よみて、くべく今をも求めゝけぶか身の涙
こぼまへる事に、何ることく、各感心して泣へさてらんなし。

聖人の誡

翁又いふやう、常にいふ所の歌なくも、無學にして諸の
といふ事を思ひ給ふも、聖人の職人合神明なりとしなのは
ものいはずして八無為といひ、人のいふ所のそれをわかむと八
志らさるに、多くの篤恭のよりまで、わかる神のごとくにして、おのれ
手ごとに準る事涙ありして、その身よ見えぬへしそてとよ夜業を
ふまへて身を措くとて現在して、おはしませ、天下に行ずるゝ
目瓜のごとくにして、ひとなるべき父母のおとし。天地無形の神の盛衰
はおろそかなるはからくハわろくの罪きまハ、所過者化とて、聖
人の身の歷多年の古今に變化をなして、路すらくものゝ示

入るゝ所に、歩歷して辯しるゝ者は、民皆畔と讓い河濱
に陶し、漁する人は、皆いしなべて自由を貴く過ちなきの
者、神となく、聖人のたぐひなり。孔子邦家を治めんは、
掌を反すがごとし。孔子の聖は、其はなはだ
高く、動の世に、そのよく和をもつて、よくこれを新にし、
凡夫のよく知る所を聖人のよくなす所にあらず。
まことに恩徳中にあらざれば、能はざるものなり。
されば君子の言、必ずしも信ならず、行は必ずしも果
その通きことのみを、ただ君子は義に流れ
ふ流れやすきことのみを、孔子もまた家を

すること、自ら天の生ずるところにして、人の知るべ
きにあらず。風の草
を靡かすがごとし。其ひきいる高くして、行は家に
行はれ、国に行はれ、天下に行はれ、
行はれざる所なし。君子は常に用ひられ
ざるを憂とす。君子は常に用ひられ
てうたがはしきを正しくす。君子は錦を衣
まことをもつて人を内行あらしめて、外見のこと
飾を、ただ蓋するがごとし。其臭ぬぎすてがたきがごとし。
つぐわらるべし。枚乘が呉王を諫る書に、欲人勿聞莫
若勿言、欲人勿知莫若勿為、山語海語、小似味淡

いつ[illegible]人のこころ[illegible]やうに、[illegible]して人のこころを
[illegible]悪く利益を[illegible]
[illegible]共おのれをやぶらくれた
[illegible]聖人[illegible]
[illegible]ちたまふ[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]共徳の[illegible]
[illegible]人皆
[illegible]来の盟を信じて[illegible]
[illegible]田紇六軍の兵をあつめて郭子儀の

軍騎の約をあらかじめ[illegible]
[illegible]
の城中に及ぶ[illegible]明白にして一毫の疑なきなり。
天下の人皆[illegible]一[illegible]共言を[illegible]共面をとると共に
[illegible]信服する[illegible]
[illegible]恩威智力の[illegible]
[illegible]世[illegible]
[illegible]共実[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

産ずれども、神は聰明正直なるゆゑに、邪氣の感ずるは、
わるきものゆゑ、妖怪不正のものも、世に流布し
侍るなり。されば、人間は天地の功用二氣の
良能とこそ、勿論正理なれども、
て氣質に、おのづから善惡あるゆゑに、神も人世に降りては、
きわまりつゝ、さるわけ、其子細は陰陽五行の氣の四時に流行
するは、天地の正理なり。不正なる氣もまた、
ていつとなく風寒暑濕をはぐくみ、おのづから不正氣もあ
りて、人を感ずれば、ゆゑに、人は天地の間、五行の氣の住まる
わけなるは、正氣とて感ずるは、正氣なり。邪氣とて感

ずるは、邪氣なり。但、正邪ともに二氣の感應なれども、邪氣
の感ずるは、神にあらず、人正氣の感は、大小ともに
精誠の不誠にあるべし。大なるは、いにしへ高宗の夢
と感じ、周公の重膝を感じ、ゆゑに、鄒衍が六月の霜
と感じ、韓愈が惡溪の鱷と感ずる。其事々異なれども、同
く精誠の感ずして、怪しく多し。第年、奥西山の集を見侍
るに、民家の女子、父の疾を憂ひ、兼ねて、人を命じ、才を
ゑて、代らんと、願ひ、其誠感じて、ある夜、一羽の鶴
、ゆゑに、遠屋飛噪して、仰ぎ空中を眺めば、大星三つ燦爛
として、月のごとく、欄楹の間を照らす。翌日、父の疾瘳ぬ。

西山郡寺とて、其ことを問ひ、其周を榜表して懿孝坊と記を作く、其事を、ハく著されたれ共、等閑なりとく、ものなるを、真感ことなりとも、絵るを、衰世に及ぶ、人心の、大なる邪氣の感のこれ、怪を生ずるなり、見ものを怪力乱神と聖人の語ることなきを、其理を窮るハ格物の一端なり、諸君ものよ、ハ、左傳に妖を獣の中繻の作て、人之所忌其氣燄以取之妖由人興也と、ことを、牧を興る言とも、燄ハ火の球盛して、進退するとあまハ人の氣なるものなり、まハ人の忌みなく、不ハ世絶ものなし、況て、鬼の、

忘れ、ことなれハ、恩却よりも、人の、ものこのはなるやうなるものなり、人の、ものこのはなるやうなるものなり、我ものもわ、ものなるものなり、是ハ、氣なるものなり、邪氣陰に来て、幻を成象ものなり、生ものまハ、ものなり、妖を、ものなり、怪を、ものなり、齊侯の彭生、日ハ、鄭人の伯有と、日ハるの類、ものなり、氣の感ハ、絶ものなり、唐宋小說の書に、洞庭湖、の、神の祠あり、大湖を渡る人、ものなり、水をのぞくやうなるものなり、ものなり、ものなる、貫人、ものなり、大波をなす、ものなり、祠を、ものなり、信じて、往事に、必賽祀せ、ものなり、とて、湖上を、風に、遇て、沉没して、ものなり、溺死ものなり、其ものを、沉ものなり、人の死を、悔ものなり、

[illegible]りよわう父山科を多年信仰して奈良へ[illegible]冥
助なるべしあやまり遺恨なるまじわをハ必山科を[illegible]
[illegible]其夢よりあれ[illegible]
るさ[illegible]酒よりあく樂を奏して其夢を報ずべしとの[illegible]
科をやうしと思ふくよわ[illegible]汝の怒氣のいきわれを思ふ
もわ[illegible]ふくれそらよ必構へ決斷一念我よりあ
て敵しくるき[illegible]謝するといへ[illegible]
の野語信ずるくあらぬなるまこと神ハ決[illegible]
るの道理わるるまじきとしハ人怒の[illegible]
なるこの氣欲ずしてやくるもやうねるる決すと其氣進退せハ

屋ふくれよきもとまくあくあくに[illegible]
ようだ孤と[illegible]孤あるもの人そよ多中とあるまハそ[illegible]
うあるて年[illegible]の[illegible]て形[illegible]人多中宣翻轉
て廻年のやうを思ひ[illegible]人くに真よ入[illegible]人多中とあ[illegible]る時
欠れる故ちうてもくるとよまして面ちやくよ[illegible]
て世ちくのきけれ[illegible]幾人くまて渡ちくあらがあ
なかと思くあくもそうきねとしのすと落ちを大久保義九
風くに我ハそうまとてくを中をそうきふまそれとしまくれ得ちさ
てしてさくも云分別の人よあるよ成とくよけさねとそ
義左ハくまくえのある時ちまるとておさんと思ふ

わ者を狐さらるとなり。さ者ハ武士の人剛にして一筋に世ゝ
さく其氣強くして狐ハ狐と妖をなす事なき。正人君子に
おそれ敬ひ。邪ハ邪に敵せず。正氣よわく邪ハ邪の勇に
ひとしく忽に消るなり。西域の妖僧傳教大師を殺すと
自うち暴死し。武三思の妾狄仁傑おそれ疫を施し家
畏縮せしなり。さるに世に正人君子少きゆゑ
邪氣已に志し厲鬼となりて世を
害する。宮殿の深閨をおかし。浮屠の邪法を信じ。おのれ
貨を費やさるハなり。とかく正體もなきものなるゆゑ
るべきなり。故に其人に氣あるやうに。怪なること

不思議と見ゆるものもわきまへよく惑ふ。正理を失ふ
て狐ハ狐にきらるゝとわすれ。あの徘徊ハ漫に
霊驗あるとて称せ。虚誕なるを造作して世を誣
民を欺く。狐ハ聚て市をなす。錢財積て山をなす。其人ハ
國家の大賊。其事ハ天下の大弊といつべし。

飛騨山の天狗

さるゝ者ハ鬼神の感通する氣の性事の動ずる氣
淫ハ邪気交わるなり。鬼神ハ疾病をなす
ものなり。故に寂然不動して毫末も氣とまらず。鬼
神もいたらざるなし。世の中変あるものハ義あるを

さて我が子多くは謝靈運の詩に達人貴自我といへり
暗に中わるくはぶるこの我といふもの中〳〵靈運のときにもあるべ
かりしに天且不違況於人乎況於鬼神乎とわらも人をハ
ふ及べ天地鬼神も我こゝろひえざるをいふなるべし代の
聖人こゝ我をもて天下の上に立て天下惟我のみわれ多とう
我志に違ふるわ殺ひとつ以て後世の賢人ゝこの我をもて方人
のかゝ立て方人の中といへども多く我わる事をもるといふなさ
ば我といふものわれをもるに一念未生の時年極来歳代
體をわれ君子みを存養をそなへ八天地も我をも
信じ萬物も我をもて育し鬼神も我をもて感應をおのづから

我をもてぬるのわるべき邪康節の一念起るなる人鬼神
も出るなり我をもて紙をもて人と以見あまをもつ
そもよ付くわやしき事なるべ小國くいやしき工の花淨山に
とする花わるき山中に枝を揺へるべて山に葉と
皇の隆さ生アりと見へ人間義をもつ天狗ともに
とも汝ハなのをとく我と天狗といふをもいとも
汝ハなのをとく我をいとをもいとをもとをもとを
をもくもんくをもくいとをもをもとをもとを
色ぎ枝のわるくをもあると縛横をして括らむとけ

るまんかのいれねてぞしらく枝より生じ其枝の末、天狗の鼻
よきくのふゐるやうし人ハ汝らん往生きまぬるよのうゐおそやし
とく犯さやぬるとそ枝の葉をけかぬ思ふ事をとがきうる事なき
ハおのふハ天狗も及ぬ中して足やくおもくし念を無けれバなく
鬼神も窺ひえざるよなんわあきる。常人多く人くて閑思雜立
常よ絶る事なく、なかれハ思ふ无作爲の中よあもある精ハ氣
をひの事ぬくうぞくまくハ我といふ物自立するものわさとれバさ
まハこの我を失くしやわるハ心源存養の工夫をなすものまハ心源
存養の工夫ハ私欲なき我本とれ。よそのん私雑をなくしまハ静
虚動直とらくにゐるなし思ふ无作爲とられ多く静虚の中より道

理のまに真者くもる。精く万物の先よ定まりて万物の後よ
墮るうすなく鬼神を制し、鬼神よ制せられる事を無
ず、臭して天下の大本やかすゞ體の體をいふも。宋思無
為よして萬化の六柄となる。不御の権をもいふも。老子の象
帝之先といひ、釋氏の唯我獨尊といふも、皆此ぎさうし是たく
るものやわらねざまを彼らへ偏とすて事物とかわし多く空寂
を事とするハ人欲を制すやいくやて天地と隔てとするまなるらバ
一心を治むといひど万事を宰する事るらバ其體ハおのしと凡くて
其用なし。なを生ずるを大本やしなかとて大柄とすべき
大よ似て大よ似る事なるべし。

禁内の立春

さきに八中庸よりいくばく甚不親と戒慎甚不聞と恐懼るとハ
誠の本源のなかのもっとも肝要なる侍養
の功夫なり。さて隠微の中一念の起るを省察しその本
源の地を礼られやうよすること肝要なり。又簡要なる作法ハ中庸
を講せ一時くらはしくもある事なく作法ハ今文ハ及
ばざるまよ。見ぬ線物線より似ぬ人倫歌の意より引合くやうに
し。古今集の巻頭よりのもる在原元方の歌もとより歌のこと
もくまなくかるやうよ。ええ作なり。二十一代集をくわ家
の集まで。春の巻頭とするとんるよ大の心八宣の寓意の寓

禮記 君子慎始差若毫釐謬以千里

なり。春のうゝ雪とくく春あつまりよりめぐるとハ春の始と
いつまハ第二段よ為るなり。しばらく冬ゆく行のけしきも見
えわく氣交とさなまくよりよんハなかふ云事ハ種とせむ。わく
雅うるべきつぶなるうるむぞ去年とやいうんとやいうんハなかの造
化もなくさんとうとやいうんとやいうんハなかの造
者といふべきまたく物うさし歌をれ作ハ初のなくしかきといかも
おのれびなまたれ物の偽行うるもとよりよるよ我人とうんハ一念のきさ
次ゝ獨居の時晴處の事なるまハなかの者きもっへぬいく
年の内く養ふ事ハ内ゝ食ふ。上念の為まとて作よ既よう吉惡のこと
きおまハ年の内くうゝ作とたとうのうく作用さまハ心宣の謬も

濂溪先生―宋の大儒周敦頤の号

毫毛尾の長よりおそるべきなり。濂溪先生の曰、幾ハ善悪なり。心ハ善悪なり。心ハ幾なり。幾ハ善悪なり。心ハ幾なり。幾ハ善悪なり。心ハ幾なり。幾

いまの世代春過ぐる夏秋冬ぞ乃ち幸ぞ袖ひちぬ結
び置のちの世まるまでと一首の中よりとりて春の
風やとく咲けと今又春よりのるまくらに結びしかの釣の
さまる物うらに歌よりあけまくに作法あるべきものの歌も
古今集よりせしかつまもゝ云系するほかなるものゝまとなきや
うにおもひ吟ずるに六ヶの味あるのたゝうら紙長ゝして言のよあるも
やうに見ゆる詩よりて、たゝ漢魏の楽府古詩のとゝ結ハ盛唐と
いと漢魏の詩実情よりも殺しておのたゝうら功拙をとらるまて見
ゆ文よ同しとのよあるに次古今集の歌も古のおゝの云系す
ぐゝ後の作者及ぶ所きとぐらやハ又べきをおとらぬさして

撰者よりゝ人のとぐもあるなど文章ハ時やゝ上下すとあるまゝ
時代の盛衰よりたまゝうあるよりゝ男ハ絵ゝ男ハ絵ゝ
作らまやうちつふすしゝ見へ作る歌人の偏も大つさおゝ
ゝ古の賢之の歌ゝ作ゝ男ハ出ゝる幸作る天文のあるゝ
とよ織田備後る一族長尾帯と不和よりて事戦よ及ぶると
備後るの家老平手中務やゝ、ハ一族の不和ハ敵國ハ
侮ると文るとのたとて和睦のゝるを謀ゝ幸ゝのハ
長尾帯の家を坂井河尻などゝ老のもと中務よりゝ
ゝそゝ見へとゝ其文のゝよ賢之が袖ひちぬの歌をのきつけるとぞ
親族のちかゝハ袖ひちぬ結ばゝやゝよりまゝものきの不和

百人一首にもあるなり。今又和睦してうたうたうるとて春ふかう
やうやう殺ぬとよのをいるなりくるるよのをくるくるもふ〜ふかうく思ひ
なりつゝ。ふるまふまとて。諸よりあけき春夫のんとも。をもをけぬるん
やくおほえ侍る。中勢のうたもつひのうたねたまくれ。角八いうど
ひ侍よりやや。角ちうやのうきく。青春秋の世より列國の士大夫
宴會の時に。必三百篇の詩を歌ふ。ふまよ志をあらはすしるし
後山事世より絶く。魏晉よりまのうふ。角〜自ら詩を賦すと成
なるべし。巧拙を事事よりなりまとたれ。なるげのうまをやまと歌
にて
さまくあるて侍まむ。うのうあると歌を好む人をみるよりほどよりほんとのく
するなるべし。必しも自ら詩ふよりはもやくも。萬葉古今なるの歌を

附よりあるりてうたひあるまく。却吟じあるむ心もやまとうふ。
白河院五月のうち侍淀より行幸の時。曉よりなる程より親らのふ
ふるうまを。後頼なるべく一首添せまるべく。女房の舟
中おく。淀とわたりの中おく。淀とわたりの中おく。
くよくあるよ。海をあてきまえけるなり。それ侍るされどそ
とくぎりの歌をいくき淀よりあるなり。作者のんとそれ
とこなるさ。我手をの袖ひちづくの歌をしるあるのうれよふ
どうまく。外の事より合あるんぞすれば比奥のおろよものな
ひくいとく感情あるてきあり侍る。周人の三百篇の詩を歌人

もろこしのいにしへ、いとせさせ給ふるなれば、その年ごろ後は信長
をいさめ、身を自殺し給ふ。その諫書を見るに、学問おつて義
理のおもむきを知る人とおぼゆ。どうちるおもきすわ。古より忠臣義
士の不幸なれど、痛ましきるハなりとて、長使英雄涙満襟
しく句とはずぞ、じけれ。ぜ。座中の人々感じあへりき。

請道ときよりまつる

ある時、傳書記、悔をしに月を行く、就客来舎せ、これを
ハ世るのおさ、怠慢ごちかるとやうに、悔くなれを、前風
て世事よさ、雑事、悔怠すれやうハ、たゞ学者の常
語ものくれ、句をそしめ、さやうをするものくれとも。畢

竟已の志の多ぬ故なり。そもそもとハ意情ぞして、世をのが
処をおこするものくれ。但世をすさ、雑事、書をよむしよ悔る
ハさもあるべ。そもハ一説あるるなるわ。すべて学とハ聖賢の
道を学ぶるものなるべ。その法をあらためて、教訓あり。力行
あるべ。されども其理を学ぶ。其理とは、書に限
所なしとも。聖賢の書を第一とする行ふ。学とハ教訓をうやし
教訓とハ讀書を主とす。おのおの大業ハ自修も学なるき
とも。学をそなへ自修ハ対しぬきハ学とハ。教訓のこと
なり。子夏も仕而優則学と云へり。仕ても学ぶ。なるとも仕
ものくれとはあきハ学とおもハ。その学とハ。讀書の類なり。

又字路何必讀書然後爲学と云ふ人ハ其ものゝ心孔門学
問ハ讀書をもとゝするゆゑ書をよむ人ハ讀書
に限るべからず書をよむ人ハ義理を講し事物に即て其理
を窮る同しく道知の事なれども力行の始なれ共より聖
人の道ハ人倫日用事物を外にせずハ父母にたゝ孝子たるの
道ハ朋友に交るに其外世に和睦するの應接に習ふて
一事一物いまだ致知の地にあらざる一動一静いまだ力行
の時にあ[illegible]ざる者ハその善なる理をきゝ悪ハその悪なる理を
さとるべし世に善道なし皆ハ学中にあるべし世
事にさへらまく恢とゝ[illegible]わるべき翁が賀にあ[illegible]対大坂

よりひとりの後生ハ地に寓居するあり翁と相見しあき
より紹介して[illegible]が他日翁に教廬を問ひ談論時
を移ス翁ハ翁ハ翁ハ世事多くして久しく廢学なん
ときゝ[illegible]ハ其人学中にて世事のかなしきあるべし
翁を訪ひ其失言を謝しき翁のさとハ讀書を廢するゆゑ
を物ゆゑ廢学ゆゑ[illegible]彼きく咎めまるゆゑ[illegible]ハ天下
のるゝ即て其ときハやく吾人其知を致さハ内外を合
するの道ゆゑ[illegible]べし[illegible]陽明良知の学をする人学者格
物の説を議く朱学ハ格物よきるもせず世の居官務職
日夜給仕する人やゝ[illegible]の[illegible]と[illegible]わるく天下の[illegible]

さと雖ども、あるべきことを学ぶ者は格物の次をわしくことはく、先一間はとはく事物の理を窮やく、後は其事をするかくおもへるよりわれん学ぶ者は格物といふはさふもわれだに、かく事るとおもふ。もろくよ即ち学の理をきはめ、者は事るとかく其事くよ即て忠の理をきはめ、昨日物いはさるもらさるを人かさるを、今の事のいちはくさるあるを問るを格物致知学也居官任職のときも必其職をもとしてかく尚居官處職事空を察し、日くよ職をよ熟し、汝實くもくす。是を格物致知なりとし、居官任職とのハ窮理のいとあるといふ。嚮よ翁の世の教よ慶安するとかく問ふべきこと

事よ大小わすくなく理よ大小なくハ、とかく格物の地よ
おもはさるハなかるべ。さるときらひすぐきまわ理よて天下の物
よ即ち其理をきはめハ、ものすべ。さるやく先後緩急の序あ
るべきなり。日用親切のるをすて、一草一木の理をきはめよ
といふ、わ理ぞ今良知の説を説くもはきやくもはきやくあ
はもとぐも聖人の道とさるもわ理だ、およて天下の道なるてもも
ぞよ人さらハなり。清くいふ理ぞ。天生二至民有物有則物も
るべなり。則ち法なり。ものとハ六義を物ふがやく、其ものぶ
ものと其法のよらはて、吾人其よ知ふく其理をきはめ、ものとぶなふ
として其道をたくもぐさや。耶之人の道とかくやく。吾人よ不

学をもつて志る良知わ[illegible]ものを即こゝの学を後さび
志くハ未熟のかゝはのとし。昆吾の鐵といへども。わらうもわ
鋭利の用をなすこゝに未磨のおよびし。荆山の璞といへども
如ゝくハ温潤の色ハ表せず。あの如くこゝの如し今善わく
こゝに聖人門人の学を問く答へ給ふ[illegible]人給へ。孟懿子ハ無違
との給ふ。孟武伯ハ慎疾[illegible]の給ふ。子游ハ不敬をいましめ
給ふ。子夏ハ色難しと諭し給ふ。此四子ハ親を敬愛するの心
わ発ぶるにハわ発ぶる。事親事長の上ハ有ゝ。或ハ事ゝ
ゆく彼ハ物を[illegible]ハ勝ゝ敬事び。敬勝て先あらざる故ゝの
給ふ事ゝ有り。仁を問ゝ答へ給ふも克己復礼わ
と告給ふ。克己復礼必日用事物ハ即ゝ其ゝを験る
事なるハ視聽言動をもゝの給ふ。仲弓ハ敬恕を告給ふ
敬恕ハ日用事物の上ゝ験るゝなるハ出門使民をもての給
ふ。其外も推ゝ志ゝ。六経の教ハ良知わゝ。心事わ
わ発ハ詩思無邪わゝ。毎不敬わゝ。易ハ窮理わ
時わゝ。春秋ハ尊周攘夷わゝ。礼ハ儀曲礼の用をわゝ。詩
ハ國風推頌の情わ。礼ハ儀曲礼の用をわゝ。易ハ陰
陽卦爻の変をわゝ。春秋ハ朝聘會盟の事を備へ。
ゆゑ六経の教ハ天下をわ発ゆ。
西の発ゆゝ。

の知らくさびらくすなわち八元を挙げ節文慎ま
ざる事なし然れども程朱の二子の教加力行は則孔門の博文約
禮よりは程ゑ〻て仏ゑ〻ゑ教加格物の位を義分とす議る
ハ多く罪を程朱に帰するのみ知れず實に孔門の教の遠ざかるべし

釈寂室の秘訣

ある日溥くて翁と語りよ昔足利家治世の季よ寂室
いけ〻れ信わ〻わ〻の幾し紙大明よ渡海し東帰の後信倍
の依ゼ〻が其位よ落〻いて吾〻緊要の一訣あり秘家に
るかなどゝ汝よ伝ふ汝毎日晨よ起き〻まのあたり〻頭顧
と瞻又目をとく袈裟を顧く心よ念ゼロよりゼ吾ハ中秋

迦文仏の法孫なるも元命を殞するも此丘の模範と為
さゞ〻ゑ先生一の光輝なるとそ寂室異端の位なるゑ〻
殊勝なるなり儒家よりも行の志操ある人ときらば大方儒
者の模範と失く〻反く釈氏よ阿同し彼ゑ風よ立るとそ
むゝ尹和靖の践履の厳敕なるハ信も見く感に儒家
ゑ周孔もそよ遜ゑ元朱文公ゑ高風と圓悟仏墓し其
梅花の詩と和さく〻蜀憐萬木凋零後屹立風霜惨淡中
むゝ元二賢ハ真儒なく異端と絶まゝ彼く帰向す
ぞゝ〻今世の儒者とるよ者人俗吏中も貶議せるゝ
で人の敬信を受べきゑ嘉きゑハ戈を信ゑして聖を言と駁

程朱と識る者も、近ごろ世に多くハ儒教に振ハざるあそ
ばすくひ、又近来武士の風の衰弱よりなるもへし、多くハ武道に熱
心なきが所致なるべし。如此ハ、そもそもの始め武士と名乗るよハ、
第一に訓ずべき汝等すべからく刀を佩び武士と名乗るよハ、名
々武名をけがさざるやうにもとめ、おのおの事ハ尽く家の国を躍
るべきの心得あり。汝等門
あるべきの心得なり。必氣を付べし。始め
あとハ親ん時ハ、なんとぞ〳〵、寂寞ハ、家の道ハ
絶まじ。其心ハ同じ。さまバ、いづれの道にも難
きなれども、なんぞ仕其心無く忘れざるハなふ

そやうにもあれ。釈氏ハ、戒を破ら除、聲利をつゝむを以て武士ハ
武道に不充とそうらざるとのことなれ。武士ハ
あとをうけ、名誉をうけ、ものハ、名誉ハ、名誉ハ、名誉
をうけ頭角をあらハし、吾儒の道を百術を続きハ、何
志をぬくことなく、其心を父の恩君の恩聖人の恩なり。孟
子ハ言ふ。先生之制民生、於三事之如一、惟其所在則致
死焉。父生之君養之師教之といふ。是ハ、共子の始めなり。
なるゆゑ、先生の大制なり。中の師とハ
ハ同異なり。道徳の師なり。術業の師なり。古人も人師ハ得
難く、師師を得やすし。今ハ道徳の師ハ得

ごとく大なる術業のなかにまハ君父の恩ハ並ぶべきハ稀なり。
なほ後世の教をうけまつり我人倫頼しに真恩深長なるハ聖人也
ア夫報本不忘恩ハ人道の大端なるをされハ父母ハ我の生命
なり我をさして我が身を一毛一髮まぐるも父母の遺體なり
遺恩のあるゆゑなるハ世ハ人ハ君恩を忘れきさて君恩を
浴して不餓不寒妻子を養ひ親族を賑すすく養生送
死の道世俗ハ一ツ第一なるく君恩ハ忘るるやうなるもの
く忘れきさしかど飽まぐ食し燒ハ衣くハ父ハ生ふまれたる
ものハ禽獸ハ近うるに幸ハ聖人の教ハ有て義理のわるをしを
もて禽獸ハ免るくハ人ハ聖人の大恩ハ有ぬ人にして高ぐ

きおのれ人として常ハ此ことを忘ずハ天理あるべからずいろび
もして半心を失ふ者ハ禽獸のわかるをもつて
翁ハ常ハ此ことを忘まじとおもひて子ハ此ことを
家学の要訣ともやはらげ今人家の子第ハ人ハ我
身の樂をのくに思ふく君父の恩を忘れ志ハ人ハきハ
言行ハ慎まなく放逸ハ流れ行る又老子碩学と稱する人
聖人の恩ハ我身ハ知ざるハ自ら高ぶり名聞ハ
勢ふく篤實なる方ハ愚のあるを以て此翁ハ家ハ要
訣を授く内省せしハ陽浮の氣を除て誠實なる
ものハ嫌ともなるべしハ彼ハ此ハ弟子とする者ハ程

朱親切の訓を聞くに嘔笑して頭痛してやまず悪心を
やいまもわすれとゝの落ちるが翁の今ふ後をきゝバさて和
吐もこゝぬべしとゝ世よ篤学の人わ聞バ老耄の瞽言よわ
聖ざる事、我無雅へう

駿臺雑話巻一　畢